

# オリーブの会通信

## مجموعة الزيتون

2020年9月27日第2号(通巻8号) **オリーブの会**  
大阪府豊能郡能勢町平通 101-453  
Tel/Fax: 072-737-9454.  
mail:olivenokai\_zeytun@yahoo.co.jp  
www.facebook.com/oribunokai

## イスラエルと米国の正常化策動に反対す



### 今号の内容

ベイルート爆破事件について	1
コロナ禍と西岸併合	2
資料「世紀の取引」	4
地図	4
6月のイスラエルによる侵害行為	5
UAWCニュース	6

# イスラエルと UAE の国交正常化について



昨日、米国の仲介の下で、イスラエルと UAE の国交正常化が行われたことが報じられた。UAE は、パレスチナにも貢献したとして、正常化交渉の中で、イスラエルの西岸併合の一時停止が合意されたことを強調した。これは、合意の本質を隠すイチャシクの策でしかないことは明らかであった。合意の発表のあと、ネタニヤフは西岸を併合することには、なんら変更がないことを強調している。

同じ方法で、自治政府も、交渉に巻き込もうしていた。自治政府は7月に入って、西岸の併合が止められるなら交渉に応じてよいと言いつつ出していた。西岸の併合を遅らせた米国の意図には、西岸の併合を一停止するということをアラブ側の言い訳として、交渉に引きこむ意図が明確であった。

トランプ政権の「世紀の取引」では、経済的な関係を優先し、援助その他の経済的利益を誘導することで、パレスチナ、アラブ諸国を誘導しようとした。すでに、反イランで共同しているアラブ反動諸国は、すでにイスラエルとの関係を深めており、まさに、その大義名分を必要としていただけである。今回、その大義名分とされたのはイスラエルの西岸の併合の一時停止である。中止ではなく、一時停止ということがイスラエルとアラブの力関係を象徴している。

もちろん、これには、自治政府をはじめ、パレスチナの諸勢力は批判をしている。しかし、この流れは、他のアラブ反

動諸国が続いていくものと思われる。アラブ反動諸国にとって、アラブの大義よりも、経済的な利益の方を優先することが明確となっている。

もともと、イスラエル、アラブ諸国を巻き込む戦略に反テロを置き、イラン、ヒズボラー、ハマスに対峙し、自治政府を巻き込み、イスラエルとの共存を作り出そうとし、自治政府との治安共同は、その要としてあった。パレスチナ内部の統一ができないのは、そのためである。

交渉によって、何も生まれないことは、オスロ合意以降の歴史を見れば明らかである。しかし、自力での解放が困難な状況、また、パレスチナ支配層の自己利益の維持から、どうしても、そちらに流れていく傾向にある。

自治政府をパレスチナの統一の枠内にとどめ、これまでの PNC、パレスチナ立法議会の決定に沿って、イスラエルとの関係を完全に切り、人民の自身の闘いによって切り開く道を進まなければならない。

それを支えていくためには BDS 運動をはじめとする人民の国際連帯を強めていく必要があり、諸国がイスラエル、米国の国際法に反する行為をやめさせていく必要があります。

UAE が、パレスチナに貢献したというのともんでもない言い訳である。

## 雪崩をうっイスラエルとアラブ反動王制の正常化、パレスチナの孤立



イスラエルは UAE、バハレーンとの国交の正常化を米国の仲介によって実現しホワイトハウスで協定の調印を行った。これはイスラエルの戦略の勝利であり、また、トランプの大統領再選に弾みをつけるものとなった。湾岸の反動王制だけでなく、スーダンなども国交の正常化に向かっている。他方、パレスチナは、ネタニヤフ、トランプによって、民族自決の道を断たれるだけでなく、エルサレムもパレスチナ国家から外され、西岸の実質併合が進むことで、困難な状況に置かれている。パレスチナ自治政府、諸派は、この国交の正常化を非難した。しかし、動搖的なアッバース自治政府は、西岸の併合を止めることができるなら話し合いに応じてよいというお人好しなことを言い出す始末であり、イスラエル、米国は、アッバースに乗り遅れないようと、席をあけて待っているのである。なにしろ、エジプト、ヨルダンに続いて、イスラエルを承認したのはパレスチナ自治政府であるから、アラブ反動王制の国交の正常化よりも先行しているのである。

### ① イスラエルの戦略、反テロ包囲網

90年代から、イスラエルは、敵をイラン、ヒズボラー、ハマスに絞り、それを共通の敵として、アラブ諸国との共同を追求してきた。サウジ、湾岸のアラブ反動王制にとつての最大の脅威は、イスラエルであるよりも、イランであった。湾岸諸国の国民の多数派は、イランと同じシーア派であり、

王族たちはスンニー派であった。王制維持をするためには、イランの存在が最大の脅威としてあった。また、ヒズボラーは、シーア派民兵組織であり、イランとの緊密な関係にあり、イスラエルに対峙し、シリアのアサド政権を支えていた。ハマスはイスラム同胞団系のスンニー派の原理主義組織であるが、第一インティファダを通して、イスラム抵抗運動（そのアラビア語の略称がハマス）として、イスラエルに対峙するようになった。エジプト選挙で同胞団は、政権をとったが、クーデターによって倒され、非合法化され、また、エジプト王制打倒の主勢力であったため、サウジ、湾岸反動王制は、テロ組織と規定している。もう一つのスンニー派の大国トルコとの関係は良い。そういうところも、同胞団、その系統のハマスをテロ組織とすることがイスラエルと共通することとしてある。

パレスチナにおいては、オスロ合意で、暫定自治政府が作られ、自治政府とPLOは、イスラエルを承認し、イスラエルとの治安共同を行い、パレスチナ人の弾圧を行っていた。当然、ハマスは、イスラエルを承認せず、イスラエルと自治政府の共同に反対してきた。パレスチナ選挙では、ハマスが圧倒的な支持を受けたが、アッバースの自治政府は、イスラエル、欧米の支援を受けて、選挙で選ばれたハマスをクーデターでガザに追いやり、パレスチナ分裂状態が作られた。アッバース自治政府は、イスラエルと闘うより、共同

して、ハマス、ハマスの支配するガザへ圧力をかけ続けていた。

その意味では、パレスチナが先行しており、現在の正常化の出発点をつくったのは、パレスチナであると言っても過言でない。そして、アッパース自治政府が動揺的なのは当然である。

## ② オスロ合意でのパレスチナの分裂

こうした状況をもたらしたのはオスロ合意である。オスロ合意に至る過程は、82年のイスラエルのレバノン侵攻、PLOの追放に始まる。アラファトなどのPLOの指導部は、チュニス撤退し、イスラエルとの戦闘とともに戦ったシリアへ撤退をしなかった。それ以外のパレスチナ諸勢力は、シリアに撤退し、シリアからレバノンのベカー高原にもどり、イスラエルとの対峙を継続した。チュニスのPLOは、武装闘争の放棄、交渉により期待をかけるようになった。

こうしたパレスチナの在外勢力の後退の中で、占領地内のパレスチナ人たちが、自ら立ち上がった。これが第一次インティファダである。パレスチナ人たちは、民族統一指導部を形成し、そのもとに統一的に戦われた。石礮の闘いと呼ばれ、重武装したイスラエル兵に対して、投石で対抗する姿は、世界的な共感を生み出し、だれがテロリストであるかを明確にした。

この戦いの成果はPLO指導部に奪奪された。湾岸戦争が勃発したが、アラファト指導部は、サダム・フセインを支持した。シリア、アラブ反動諸国を含めて反サダムに流れ、また、国際的にも孤立することになり、91年10月30日に始まり、米国の主導で、イスラエル、ソ連、アラブ諸国が参加するマドリッド中東和平会議に参加せざるを得なくなった。そこからオスロ合意の暫定自治協定へと突き進むことになる。

暫定というのは名ばかりで、イスラエルの手先としての自治政府がつくられることになった。イスラエルが期待したのは、パレスチナ人によるパレスチナ人の弾圧である治安共同である。自治政府の武装はパレスチナ人に向けられたものでしかない。そのために武装が許可された。それが、イスラエルが第一次インティファダから得た教訓であった。反対にアラファトなどパレスチナ指導部は、インティファダの成果を投げ捨ててしまった。

その結果、パレスチナの分裂状態が継続されることになった。アラファトが死去し、そのあとを継いだ、アッパースが継続した。

これは、明確にイスラエルの戦略の勝利だった。パレスチナは、72年に国際的な認知を獲得して以来の国際的な地位を失うことになった。

## ③ アラブの日和見 (歴史的に、民族的価値、宗教的な価値の軽視)

アラブの王制は、イスラムのもとで形成されてきたが、本来は宗教的指導者であるべきものが、世俗的な王制となり、民族的、宗教的価値観が失われ、まして、オスマントルコの支配のように、イスラムを取り入れてはいるが、宗教的原理よりも、世俗的な王制の要素がさらに強まった。

第一次帝国主義戦争、第二次帝国主義戦争を経て、米英仏などの後押しで独立したアラブの王制は、帝国主義の傀儡であった。

そうした、王制を打倒する旗印が、アラブ民族主義、社会主義であった。もう一方で、イスラム同胞団などのイスラム原理主義からの王制を打倒するなげれであった。

1940年代に汎アラブ主義を掲げたシリアでバース党が結成された。キリスト教徒によって設立され非宗教的なアラブ民族主義と社会主義を掲げた。これがアラブ復興社会党(バース党)の始まりであり、シリア、イラクで、軍事クーターで政権を奪取することに。

エジプトでは、ナセルの率いる自由将校団とイスラム同胞団で王制を打倒し、共和制の国となる。アラブ民族主義が影響力を強め、リビアでもカダフィ大佐が王制をクーターで打倒した。パレスチナの中でもハバッシュラのアラブ民族主義運動(ANM)が組織される。

第二次中東戦争でエジプトが敗北し、67年の第三次中東戦争でも、エジプト、シリア、イラク、ヨルダンに先制攻撃をしたイスラエルが勝利し、アラブ民族主義国家勢力への失望が広がり、パレスチナ人は、自ら武装闘争を開始した。アラブ民族主義運動も、中国、ベトナム解放闘争の影響を受け、共産主義を受け入れ、人民戦争、ゲリラ戦争へと進んだ。それが、パレスチナ解放人民戦線(PFLP)、パレスチナ解放民主戦線(DFLP)である。PLOがアラブ諸国の機関ではなく、パレスチナ自身の機関になったのもこの時である。パレスチナ難民を基盤に、占領地の外から潜入するゲリラ闘争を展開した。自ら闘うことで、国際的なPLOの認知は高まったが、すでに述べた82年のイスラエルのレバノン侵攻で、その基盤は失われた。また、国際的にもソ連、東欧社会主義が崩壊し、パレスチナは国際的な後ろ盾を失った。

第一次インティファダが起こるが、イスラム同胞団系ハマスが登場し、イスラエルと闘い始め、影響力を強めた。それまでのイスラム勢力は、イスラエルと協調的であり、パレスチナ内の共産主義者、無神論者を敵視していた。その結果としてパレスチナ内部でイスラム原理主義が力を持った。

## ④ イラン、シーア派原理主義、ハマス

イランは、米国の手先であったシャーをイラン革命倒し、イスラム共和国を誕生させ、反米・反イスラエル路線をとり、レ

## オリーブの会通信 第2号(通巻8号)

パノンのヒズボラなどのようなシーア派原理主義を支援してきた。また、イラク、湾岸諸国のシーア派系の国民への影響力をもつようになってきた。また、シリアのアサド政権を支援してきた。

イスラエルにとっては、イラン、トルコという親米、親イスラエルの中東での存在が、イスラエルの生存にとって、重要であった。しかし、イラン革命は、イランを反米・反イスラエルに転換させた。そして、核武装を射程に入れたことで、イスラエルにとって最大の脅威となった。また、トルコもイスラム系の政党が与党になることで、反イスラエルに立つようになった。

こうした情勢の変化の中で、これまで敵対してきた親米アラブ諸国を取り込み、イスラエルの安全を確保する方向に向かった。アラブは、軍事的には敵ではなくなっている。

米国もまた、中東地域での最大の不安定要素として、イランをとらえて、イランの封じ込め、または、その政権の転覆をはかろうとしてきた。トランプ政権になって、イランとの核合意から離脱し、より敵対的になった。また、それによってアラブ諸国をイランに対決する路線をとり、サウジアラビア・フセインをそそのかして、イラク・イラン戦争を起こし、イランの打倒を図ろうとしてきた。

反テロ戦争を契機として、イスラエルと米国は、イラン、ヒズボラ、ハマスをテロ組織として、反テロを共通利害として、アラブ諸国、パレスチナ自治政府までのイスラエルとの共同を作り出そうとした。そして、水面下での共同は進展していたのである。

⑤ 自治政府の動揺。イスラエル、米国に足元を見透かされている。

現在、自治政府は、表面上正常化を非難しているが、これまでの歴史的な経緯からも理解できるように、いつ正常化の流れにのるかもしれない。米国、イスラエルもそれを知っている。自治政府に流れに乗り遅れないようにと席を空けて待っている。西岸併合への強硬姿勢とUAEとの交渉での併合の一時停止を条件として正常化協定を結ぶというのは、自治政府に、交渉に応じれば西岸併合を止め

ることができるのではという幻想を洗えるものになっている。実際に自治政府の中でも西岸の併合が止められるなら、交渉に応じてはというものが出てきている。

パレスチナの世論調査では、アッパース、自治政府の支持は非常に低い。悪評なのは、自治政府の腐敗とイスラエルとの治安共同で、パレスチナ人への弾圧を行っていることである。

ハマースとアッパースのフアタハ以外のPLOの諸派は、パレスチナ統一を求めつつ、自治政府を批判している。ハマース

とフアタハで統一のための話し合いが繰り返し行われているが成功していない。

そうした状況の中で民族統一指導部をなれるものが声明を出した。そして、統一した闘いの方向を出したが、パレスチナ諸勢力の統一した団体ではなく、統一の方向を支持しながら、批判的な見解が出されている。

話し合い、交渉ではなく、人民の抵抗闘争と国際世論の形成によって、パレスチナ解放を目指す闘いが必要とされている。そのためにも、第一次インティファダの時のような民族統一指導部の登場が期待されている。



## 2020年8月のレポート

ヨルダン川西岸地区のパレスチナ農業セクターに対するイスラエルの体系的な攻撃が、ガザ・ウエストバンクのUANCの農業委員会は、8月に西岸のパレスチナ農業セクターに対するイスラエル占領の攻撃を監視しました。

### 1. 農業施設の解体

2020年8月2日、イスラエル占領軍とイスラエルm、ヨルダン渓谷北部の東に位置するキルベトアルラスアルアフマルを襲撃。ヨルダン川西岸北部のトゥバスで軍は家屋の解体通知を出し、バラック、納屋、家畜農場を破壊。

2020年8月3日、イスラエル軍は、ベツレヘムのKisan村の市民にバラックの解体通知を届けました。

2020年8月4日、ヨルダン渓谷のal-Ras al-AhmarとAtoufで施設、テント、畜舎の解体通知が届きました。

2020年8月5日、占領軍はレンガと強化されたブリキで作られた農業小屋と、エルサレムのアルイサウイヤの農地にあるいくつかの小屋を取り壊しました。

2020年8月5日、イスラエルの占領軍は、レンガと木で作られた2つの農業施設を、ラマツラの北西にあるランテイス村にある亜鉛屋根で破壊しました。最初の施設の面積は60平方メートルで、野菜と果物の栽培に使用され、2番目の施設の面積は80平方メートルで、野菜の栽培に使用されません。

2020年8月6日、占領軍は水ラインを破壊することに加えて、それぞれが2000立方メートルの容量を持つ水を収集するための2つのプールを解体しました。

2020年8月17日、イスラエルの占領軍はナブルスのベイトダジャンの村にある家畜舎の解体通知を出しました。

2020年8月20日、イスラエルの占領軍がヨルダン渓谷北部のアトゥフにあるバラックを解体しました。バラックは羊の畜舎として使用され、水槽と動物用飼料が含まれていました。2020年8月25日、ブルドーザーは、120平方メー

ルの面積を持つラマツラーのワティアルシークで、2つのバラックを解体し始めました。バラックの1つは、キッチンとバスルームのある住宅に使用され、もう1つは、家畜と羊の飼育に使用されます。占領軍はまた、イスラエルの民間企業の労働者を連れて、2つの住宅用テント、(6)牛と羊の飼育に使用されるバラック(それぞれ60平方メートルの面積)、および(2)水タンクと電気ワイヤーを破壊。エリアCで許可なしの建物を建設したという口実で

### 2. 土地と樹木への攻撃

2020年8月2日、入植者はラマツラーのアルムギアルの村で15ドノムの土地を燃やしました。

2020年8月3日、イスラエルの占領軍はベツレヘムの東にあるキツサンの村で軍事目的で200ドノム以上の土地を押し収めました。

2020年8月4日、イスラエルの占領軍は、行政の車両を伴って、サルフィットの西にあるDeir Ballutの町を襲撃し、オリーブの木を根こそぎにするために8つの家族に9つの通知を送り、別の家族には(TaamerとAbu al-Rayat)と呼ばれる地域で、イスラエルの権限下であり、アパルトヘイトの壁の一部が建設されているエリアCに落ちるという口実で土地の耕作を停止します。

2020年8月4日、入植者はヨルダン渓谷のアルファリシヤのIhmairの地域に水タンクを設置し、木を植えました。

2020年8月5日、イスラエルの占領軍がヨルダン渓谷のアルジフトリク村の北にあるキルベトアランを襲撃し、24歳のナツメヤシの苗木と苗木を約100本放り出し、根こそぎにした。

2020年8月10日、イスラエルの占領軍がカルキリヤの東にあるアラブアルクーリの群集を襲撃し、農地のエリアを荒らし、エリアを占領する準備として配水管を設置しました。

2020年8月10日、イスラエルの占領軍は100本のオリ

## オリーブの会通信 第2号(通巻8号)

ブの苗を根こそぎにし、南のワティラハルの村の近くにあるハレットアルナラ-周辺の農地を荒廃させました。ベツレハムの。さらに、彼らは2つ半ドノムの土地を破壊し、擁壁を破壊し、それが古代の地域であると主張しました。Khallet al-Nahlahが「Givat Eitam」と呼ばれる居留地を確立する目的で、1,200ドノムの土地の押収に代表される居留地攻撃を受けていることは注目に値します。

2020年8月13日、「代金を払う」グループからの入植者のグループが、ナブラスの南東にあるイツァ-居住地を離れ、アシラの東部地域を攻撃した。石でキブリアの村の2つの家の窓を壊した。オリーブの木と生産的なアーモンドが植えられた市民の土地に加えて、何十もの土地に火を放ちました。入植者は多くの村人に直面し、前述の入植地に向かって逃げました。

2020年8月16日、入植者はアルムガイエ村のシベイト地域に発砲しました。

2020年8月16日、占領軍は、トゥルカルム南部のJabara、Shufa、Al-Rasの村で数十の土地を破壊しました。対象となる土地の面積は800ドノムで、工業地帯の建設を口実に没収されます。

2020年8月17日、イスラエルの占領軍がトゥルカルムの東にあるカフルアルラ-バードの町を襲撃しました。これらの部隊は、エスフルシヨファ、ダナバ、カファ、カフルアルラブドの村と市を結ぶカフルアルラブドの町の一部であるラスアルマシドとアルハファシー-エリアで市民の土地を広範囲に破壊し始めました。市民の土地に建てられた(Avni Hefetz)集落の利益のために10kmの入植地道路を建設することを目的とした、荒廃した作戦数時間続いたかき混ぜプロセスは、約200度無の土地にに影響を与えました。イスラエルの計画によると、入植地道路の建設を完了するために、さらに600のドノムの土地が破壊されることが予想されます。

2020年8月22日、「ヤコブダリア」の入植者のグループが、アマチン/ヘブロン350個のオリーブの苗を根こそぎにしました。

2020年8月23日、シャルドブレ-ンのアルタイヤルサイトの土地を取り巻く2人の入植者がワイヤーフェンスを切り、約6つのブドウの苗を根こそぎにし、前述のサイトから農業用具を盗んだ

### 3. 農家、家畜、資産を攻撃する

2020年8月1日、10頭の羊が西岸の中央にあるラマツラ北東のアルムギアの村の東側にあるキルベツトジャベイトの土地の前哨基地に住む入植者によって毒をもられた後、死亡しました。飼主は、羊がその地域の入植者によって故意に毒殺されたと疑っています。

2020年8月2日、入植者はTurmus Ayaで4頭の羊を殺しま

した。

2020年8月10日、占領軍はBeit Ummar/ヘブロン3の作物の灌漑に使用されていた3台のウォーターポンプを押収しました。2020年8月23日、ヘブロン南、ヤツタの東にある押収された市民の土地に建てられた「ハファットマオン」の入植地前哨基地からの多くの入植者が、シツダットアルタにいる間に羊飼いを攻撃しました、そして彼らの羊が放牧するのを防ぎました。この地域は、イスラエル国土管理局によって「国有地」と宣言された後、入植者による継続的な攻撃を目撃し、入植者によって押収されています。これは羊飼いに彼らの命を恐れて牧草地を去ることを余儀なくさせました。入植者たちは、シツダットアルタラとウムムサイトウネの地域で荒廃した道路工事を行い、前述の前哨基地の近くに設立された農業施設に到着しました。

2020年8月25日、占領軍はヨルダン渓谷のサコットエリアで2人の羊飼いを追跡した後、2人の羊飼いを拘束しました。

8月31日、入植者がYatta Al-Khalilの羊の群れを走り回り、その羊飼いは幸運にも生き延びました。

### 4. 入植地前哨基地と拡張

2020年8月24日、開拓者はヘブロン南にあるハレットアルフォルンの土地に前哨基地を設置し、キルヤットアルバの入植地と他の農業入植地「バニヘファ-」、「カルミエル」、「ヘブロン山脈の南を通るマオン」をリンクさせようとしている。

2020年8月24日、入植者のグループが「私たちの土地」のロゴが付いた服を着て、ヨルダン渓谷のさまざまな地域に広がりました。彼らは毎日、個別に、グループで、山岳地帯と牧歌的な地域を歩き回り、居住者の土地をフェンスで囲み、その地域に新しい集落の前哨基地を拡張するように働きます。



5. 漁師に対する攻撃

8月8日、イスラエル占領海軍がガザ海北部の漁師船に発砲しました。

8月12日、イスラエルの占領軍は許可された漁場を68海里に縮小しました。

8月14日、イスラエルの占領海軍が3海里のエリアで漁師のボートを追跡し、彼らに発砲し、ボートに向けて汚水を放水し、その結果、ゴム弾で漁師が負傷しました。

8月16日、イスラエルの占領海軍が重い弾丸を発射し、下水を漁師とその船に放水し、漁を禁止し、強制的に港に戻るよう強制しました。

8月17日、イスラエル占領海軍は、ガザ北部のアルスダネヤ西部の漁師に発砲したに加えて、ダイラルバラ海の漁師船に2海里未満で発砲しました。

8月18日、イスラエル占領海軍は、アルスダネヤの西部地域で漁師の船に発砲し、2海里未満で砲弾を発砲し、彼らは釣り禁止しました。

8月19日、イスラエルの占領海軍が2海里未満のエリアにある、Dair-Albalahの東部にある漁師のボートに下水を汲み上げ保水した。

8月20日、イスラエル占領海軍がカーンユニス海の漁船に向けて水上ポンプを開きました。

8月21日、イスラエル軍の船がカーンユニス海とアルスダネヤ西部の漁師船に向けて発砲しました。

8月23日、イスラエルの占領海軍が1マイル未満のガザ海を射撃して漁師を攻撃しました。

8月24日、イスラエルの占領海軍が1マイル未満のガザ海を狙って漁師を攻撃しました。

8月25日から31日まで、海は完全に閉鎖されました。



文化

ムハムード。ダルウイ-シユの詩

敵

一か月前私は、そこにいた。一年前私は、そこにいた。私はどこにもいなかったように、いつもそこにいた。1982年に今起こっているように我々に何が起こった。我々は包囲され、殺され、我々が直面した地獄と闘った。犠牲者、殉教者は、だれにも似ていない。かれらのそれぞれは、違う体格、違う特徴、違う目、違う名、違う年齢を持っている。殺人者たちは、みな同じように見える。奴らは、一つの存在である。ハードウェアの欠片に配置され、電子のボタンを押し、殺し、消える。彼は我々を見る、だが我々は、彼が見えない。彼が幽霊だからではない、彼の思想への鉄仮面だから—彼は特徴もなく、目もなく、年齢もなく、名前もない。それは、彼が一つの名前を持つことを選んだからである：敵

注：1982年、イスラエル軍のレバノン侵攻、ベイルート包囲のことである。2か月にわたって、ベイルートは陸海空から攻撃を受け、兵糧攻めにあい、パレスチナだけではなく、レバノン人たちの組織も抵抗した。

A River Dies of Thirst より

## パレスチナの食べ物

キャベツのことをマルフーフと呼ぶのだと信じていました。マルフーフという料理の名前だということを知りました。アラブでは、キャベツの食べ方として一般的で、日本のようにサラダに使ったりはあまりしないようです。

パレスチナ料理 マルフーフ



### 守ろう！オリーブの木を カンパのお願い



#### オリーブ畑再生基金の目的

土地を守ることは抵抗闘争である。  
パレスチナの農民の土地を守る闘い、  
生活を守る闘いを支援します。  
集まった基金は、パレスチナ農業  
労働委員会連合(UAWC)に送ります。

#### 郵便振替

記号番号：00960-2-303500番  
名称：オリーブの会(オリーブノカイ)

#### 他行等から振り込む場合

店名(店番)：〇九九店(099)  
預金種目：当座  
口座番号0303500